

令和3年度 学校評価 学校関係者評価書

| | |
|-----|------------|
| 学校名 | 三木市立緑が丘中学校 |
|-----|------------|

1 学校教育目標

| |
|--------------------------|
| 自ら考え 正しい行動のできる 心豊かな生徒の育成 |
|--------------------------|

2 本年度の重点目標

| | |
|------------|--|
| (1) めざす学校像 | ① 安全で安心して過ごせる学校 ② 思いやりにあふれ、人権への配慮が行き届いた学校 ③ 自主的・意欲的な活動を通して、子どもたちが自己実現できる学校 |
| (2) めざす生徒像 | ① 知・徳・体の調和がとれ、自立して自らの夢や志の実現に努力する生徒 ② 自分を大切にするとともに、友だちの喜びを自分のことのように喜べる生徒 |
| (3) めざす教師像 | ① 確かな人権感覚を持ち、子どもたちに寄り添い、伸ばす教師 ② 子どもたちの自己実現を助け、自立した子どもたちを育てる教師 |

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない】

| 評価の観点 | 評価項目(取組内容) | 取組(達成)の状況 | 評価 | 改善の方策 |
|--------------|--|--|----|--|
| 学習指導 | ①学力向上のためのわかる授業づくり ②補充学習や家庭学習の充実による基礎学力の定着 | ① 週30コマを基本とする運用で授業時数は確保することができた。 ① わかる授業のアンケート項目は目標を達成した。 ① 予習を重視した取組により授業内での活動に時間を多くとれた。 ① 家庭学習と授業の連携により「50分授業に70分の効果を」をテーマとして行った研究の発表会では成果と課題をうまく発信することができた。 ② 研究成果の継続した実践が今後の課題である。 | A | ① タブレットPCの有効活用等、学力向上研究発表を踏まえた授業改善に取り組む。 ② 予習を重視した家庭学習と授業の連携を進めるとともに自学自習の習慣をつけさせる。 |
| 生徒指導(不登校) | ① 予防的生徒指導の充実 ② いじめ対策、不登校対策の充実 | ① いじめアンケート等は計画に沿って実施することができた。 ① コロナ禍において美態に即したきまりの見直しを行うことができた。 ① 生徒理解に関しては、行動の背景を理解した支援・指導をさらに進める必要がある。 ② いじめ等の早期発見に努め、初期段階での解決を図れた。 ② 不登校対策体制の見直しにより情報共有が円滑になった。 | B | ① 教職員の声かけ等、相談しやすい環境づくりに努め、生徒の背景に目をむけ、情報交換を迅速に行う。 ① コロナ禍を良き教材と捉え、人権的視点を重視するとともに、自ら考え、判断する力を身に付けさせる。 ② 多様化する不登校に対して、情報交換や関係機関との連携し、指導方法について研修を深める。 |
| 特別活動 | ① 生徒の主体的な活動の推進 ② 各種行事の活性化 | ① 体育祭の代替行事では、規模を縮小した中ではあったが、生徒の企画運営への参加を図り、創意工夫された内容とすることができた。 ② 感染症対策のため、体育祭や修学旅行等、多くの行事が中止や規模の縮小となったが、体育祭ではDVDを作成して配布したり、文化祭の様子を動画配信したりするなど発信方法の工夫を図った。 | B | ① 生徒の意見やアイデアを積極的に取り入れ、学校運営に積極的に参画しようとする意識を高める。 ② 従来の方法にとらわれず、新たな発想で学校行事を展開していく。 |
| 道徳教育 人権教育 | ① 道徳教育の充実 ② 人権意識の向上 | ① 評価に関する研修を効果的に実施することができた。 ① ICTの活用を道徳の授業に効果的に取り入れることができた。 ① 学級により差はあるが通信を通して家庭との連携ができた。 ② 感染対策を意識しつつ、人権講演会を行うことができた。 ② 11月には週ごとに重点テーマを設定して人権強化月間を実施することができた。 | B | ① 評価のあり方について継続して研究を進めるとともに、授業時間数の確保に努める。また、学級通信等を通じて保護者との連携を進める。 ② 道徳の授業で対話とICTの融合を進める。 ② 志染中学校との統合を受け、違いを認め合う人権教育の充実を図る。 |
| 特別支援教育 | ① 支援を要する生徒の理解と支援の充実 ② 交流を通じた学びの充実 | ① 職員間で自由に意見を交換し、指導に生かすことができた。 ① 保護者や関係機関と連携を効果的に行うことができた。 ① 特別支援学級にとどまらず、特別支援教育指導補助員を有効に活用することができた。 ② コロナ禍の影響で交流の機会は減少したが、幼小中特が連携した情報共有を図ることができた。 | B | ① すべての生徒に対して、特別支援教育の視点を生かしたかわり方をさらに充実させていく。 ② 今後の感染状況を見ながら、オンラインを活用した交流等、新たな交流の形態を模索していく。 |
| 家庭・地域との連携 | ① 家庭との連携強化 ② 学校からの情報発信や学校公開による開かれた学校づくり | ① オールスクール等を実施することはできなかったが、通常時の連絡等をより密にし、連携をとることができた。 ① 入学説明会等、各種説明会においては資料配布と共に説明動画を配信し、来校できない部分を補完した。 ② 学校行事の動画配信など新たな取組を実施することができた。 ② 公民館行事では動画配信による参加をすることができた。 | B | ① PTA学級学年委員会等、意見交換の場が減少する中、それを補完する手段を検討していく。 ① 保護者連絡システム「スズール」を活用した効率の良い連絡方法を研究する。 ② 今後の感染状況を踏まえ、保護者の学校行事や、生徒の地域活動への参加について検討する。 |
| 教職員の育成 | ① 研究授業・研修会の充実 ② 生徒理解に努める教職員の育成 | ① 学力向上サポート事業を通して、学力向上に関する校内研修を充実させることができた。 ① 教員が授業を参観しあう週間を持ち、良さを認める交流ができた。 ② 生徒指導、不登校対策会の中で、自由な意見交換ができた。 ② サポート教室の運営や保健室対応の担当を、時間割の中に組み込み、漏れのない対応を通して教職員の意識が高まった。 | A | ① 今年度の研究会の成果を継続して実践できるよう、人材の育成に努める。 ① 感染状況に左右されない研修形態を研究する。 ② 子どもたちの背景を理解し、純えず自己の改善を図ろうとする意識を教員の中に育成していく。 |

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

| |
|---|
| ○昨年度の取組や達成状況を土台に、さらに具体的な工夫や改善を図っており、学校関係者の意見が反映されている。 |
| ○生徒・保護者・教職員アンケートの三者比較等、公平な立場で評価しようする姿勢が見える。 |
| ○保護者アンケートにおいて「記述欄」を設けており、保護者の本音を知ることができている。数値だけでは判断できない部分も評価に活かされている。 |
| ○評価項目を細分化した「チェックリスト」が利用されている。評価の根拠が示されており、その妥当性を判断する上で有効である。 |
| ○学校教育目標、本年度の重点目標を基本として、評価観点の設定が適切と考える。 |
| ○評価項目とその内容は細分化され、且つ内容の多くの達成状況は全てのアンケートに対応しており、評価方法として合理性がある。 |
| ○保護者自由記述欄の開示は評議員が各学年の雰囲気を含むことに役立っている。 |
| ○評価方法は適切であり、取組も今までの枠組みにとらわれない自由な発想で行われている。 |
| ○評価項目が多岐にわたり、総合的な評価ができるようになっている。 |
| ○学校評価アンケートの項目では肯定的な回答の比率が生徒・保護者・教職員でバラつきがあり、保護者の意見が激しいように感じた。 |
| ○生徒・学校の活動が元気なことは大変良いと感じる。 |
| ○教育環境やルールを守ること、マナーの向上に力を入れていることがわかり、嬉しく思う。 |

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

| 学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 |
|---|
| 評価は妥当である。 ○教職員の指導努力に生徒は答えようとしていることが伺える。それに対し、保護者は学力思考が強くなり、十分理解していないことが残念である。○三者評価に皆手ごたえがあるが、教職員がわかる授業を行っていたに尽きている。○わかる授業の生徒アンケート結果の81%が、全語学力テストの結果が全国平均以上である。学校生活の基盤が学習意欲であり、タブレットの活用や授業の工夫も進んでおり、家庭学習のアンケート結果の77%である。さらなる改善策の学習意欲の向上や学習の振り返りについても評価できる。○コロナ禍の状況下で学習ができるように工夫してきており、新しい学習方法(予習・授業準備等)に取り組んでいることが評価できる。○コロナ禍の中で、ICTの活用と自学自習の習慣をつけることは非常に大切と捉えられている。評価として適切である。 |
| 評価は妥当である。 ○教師の努力にもかかわらず理解してくれないと感じる生徒が多いことは春学期の心の問題の種さのあらわれだと思ふ。しかし、つまずいていない生徒がいることも多い。これを早期において努力を続けていってほしい。○基本的なルールやマナー等、生徒指導は評価は三者は高い。また、いじめ等の早期発見に努め、初期段階での解決を図れたことは評価できる。今後とも、生徒指導をお願したい。○いじめ等の早期発見に努めるとともに、自ら考え、判断する力を身に付けさせる。 ○特に関心しているのは、コロナ禍で生徒の精神状態も懸念があることや、学校の多様化など問題の複雑化は理解できている。改善策は適切である。校内だけで問題を抱えず外部関係機関や保護者とのコミュニケーションを大事にしていることが評価できる。改善策は適切と捉えられている。○コロナ禍でもいじめやそれに関連する不登校が発生しやすいと思ふ。○保護者の自由記述欄に問題解決に近づこうとできる積極的な意見もあり大切にすべきと思ふ。 |
| 評価は妥当である。 ○在学活動について、保護者の評価が低くなっている。コロナ禍の中で生き生きと活動する姿を目にする機会が減ったことが原因かもしれない。修学旅行等、高い評価を得ている努力を続けていってほしい。○感染症対策のため活動は少なかつたが学校行事については生徒の多数が主体的に参画している。○コロナ以前に比べると、代書行事の工夫や箱の中での何が出来るのかを工夫し検討しており、生徒の主体性を重視する点も評価AIに評価している。保護者への行事記載配信も積極的であると思ふ。○以前より生徒会を中心に生徒の意見を取り入れた行事運営や工夫があり、学校が生きてきていると思ふ。○いろいろな工夫がされており評価できる。○コロナ禍の中で学校の大きさがよくわかる。そんな中で日々工夫されていることに評価を下がる。 |
| 評価は妥当であるが、AIに近いBと考えられる。 ○感動防止対策を取りながらの人間関係構築は、今後の道徳教育の観点から、満足度80%を超えてほしい。○教職員は各学級や部活での工夫を考えた上で、生徒や保護者から求められることは非常に難しい。ベテラン教員の資質向上に努められたい。○教職員は各学級の連携を密にしていることがアンケート結果からよくわかる。また、HPの運用や学校通信、学級通信の配布により、情報発信を随時行っており、「助けた学校づくり」に努めていると評価できる。○コロナ禍でオールスクールの実施できなかったことや工夫した行事には保護者は参加できない状況下で学校の努力を保護者はよく理解していると感じた。アンケートの結果が低かったことや、アンケートで生徒の意見が多くなり、コロナ禍の学校指導に肯定的であった。また、学年の学校指導、修学旅行に感謝する言葉が多かった。○コロナ禍の中、子どもと先生との連携が少なすぎた。また、学年の学校指導、修学旅行に感謝する保護者と教職員の相互理解を深めるために連携強化を図ってほしい。 |
| 評価は妥当である。 ○学力向上サポート事業をはじめ、様々な分野で校内研修を推進させている。教師の姿勢は素晴らしい。しかし、情報化やコロナ禍の中で、春学期の生徒一人ひとりに対しては、個別の指導技術やスキルを若手教師に伝える研修や、情報化やICTの活用を道徳の授業に効果的に取り入れることができた。○保護者や関係機関と連携を効果的に行うことができた。○特別支援学級にとどまらず、特別支援教育指導補助員を有効に活用することができた。○コロナ禍の影響で交流の機会は減少したが、幼小中特が連携した情報共有を図ることができた。 |
| 評価は妥当である。 ○職員間で自由に意見を交換し、指導に生かすことができた。 ① 保護者や関係機関と連携を効果的に行うことができた。 ① 特別支援学級にとどまらず、特別支援教育指導補助員を有効に活用することができた。 ② コロナ禍の影響で交流の機会は減少したが、幼小中特が連携した情報共有を図ることができた。 |
| 評価は妥当である。 ○学力向上サポート事業をはじめ、様々な分野で校内研修を推進させている。教師の姿勢は素晴らしい。しかし、情報化やコロナ禍の中で、春学期の生徒一人ひとりに対しては、個別の指導技術やスキルを若手教師に伝える研修や、情報化やICTの活用を道徳の授業に効果的に取り入れることができた。○保護者や関係機関と連携を効果的に行うことができた。○特別支援学級にとどまらず、特別支援教育指導補助員を有効に活用することができた。○コロナ禍の影響で交流の機会は減少したが、幼小中特が連携した情報共有を図ることができた。 |
| 評価は妥当である。 ○職員間で自由に意見を交換し、指導に生かすことができた。 ① 保護者や関係機関と連携を効果的に行うことができた。 ① 特別支援学級にとどまらず、特別支援教育指導補助員を有効に活用することができた。 ② コロナ禍の影響で交流の機会は減少したが、幼小中特が連携した情報共有を図ることができた。 |
| 評価は妥当である。 ○学力向上サポート事業をはじめ、様々な分野で校内研修を推進させている。教師の姿勢は素晴らしい。しかし、情報化やコロナ禍の中で、春学期の生徒一人ひとりに対しては、個別の指導技術やスキルを若手教師に伝える研修や、情報化やICTの活用を道徳の授業に効果的に取り入れることができた。○保護者や関係機関と連携を効果的に行うことができた。○特別支援学級にとどまらず、特別支援教育指導補助員を有効に活用することができた。○コロナ禍の影響で交流の機会は減少したが、幼小中特が連携した情報共有を図ることができた。 |